

## 武庫川だより 「在来種と言われているメドハギだが」

森田 至



メドハギはマメ科ハギ属です。武庫川では河川敷（高水敷）に生育しています。

マメ科植物は根粒バクテリアと共生しているため痩せ地でもよく育ちます。名前のいわれは、陰陽師が占いの棒として使ったメドギ（筮）が本種であり、メドギのハギがメドハギになったと言われています。今では筮竹と呼ばれタケが使われています。

ところで、皆さんは「外国産在来種」という言葉を聞いたことがありますか？

外国産在来種は日本種と同一の学名をもつもので、海外で生育しているものです。法面緑化のためにコストの安い外国産の種子が播種されていることがあります。そんな中にメドハギやコマツナギやヤマハギなどがあります。これらは同一種であってもDNAレベルでは異なるので、交雑すると遺伝子の攪乱が引き起こされる事が懸念されます。現在我々が見ているメドハギはすでに交雑しているものかもしれません。形態的な違いがあればわかりますが、厳密にはDNAを解析しないとわからないでしょう。「種内(遺伝子)の多様性」と「遺伝子の攪乱」をどのように評価すればよいのか、私には難しくすぎてよくわかりません。

## ツリガネニンジンの咲く時期になりました

森野 光太郎



8月末～10月になると水はけがよく日当たりのよい山地の草原や除草管理された河川の堤防には、薄紫色のツリガネニンジン（キキョウ科）が咲き始めます。特徴的なこの名前の由来は、花が釣鐘型、根はチョウセンニンジンに形が似ているのでこの名前がつけられました。

また、西谷地区には絶滅危惧種になってしまったキキョウも自制しており、見つけたら秋の訪れを感じてしまいます。

植物にとって花は、次世代に残す種子を作るための大切な器官です。身近に咲いている花は一体どんな仕組みで受粉するのか、花の形は草木の進化と、どんなつながりを持つのか、外に出た時に自分の見つけたものくらべて調べてみてはいかがでしょうか。

ツリガネニンジン は西谷ふれあい夢プラザ付近で撮影しました。





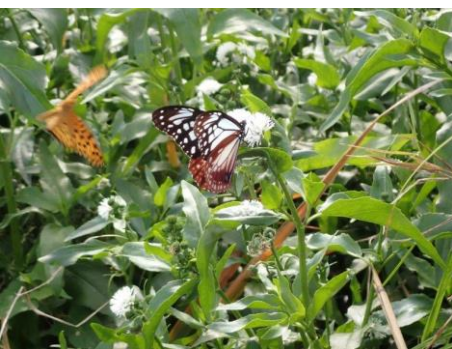
元はため池の片隅が陸地化した所。そこにイシミカワがぎっしり、広く、元ため池の水面を半分以上覆っている。ため池の囲いからはみ出し旺盛な勢いだ。まず三角の葉が目に入り次に青い実が、そして丸い円盤のような托葉と目で追っていくと間違いなくイシミカワである。よく見れば茎の逆さのトゲも見える。今(9月末)は一部分だけが青い実だがもう少しすれば全体が青く染まるのか、美しく草紅葉になるのか楽しみに待とう。

## 久しぶりに武庫川河川敷へ

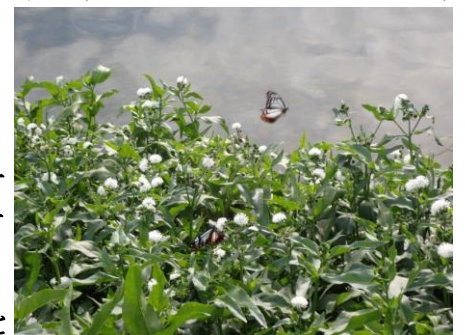
垣田 衛



市役所に用事があったついでに、久しぶりに武庫川河川敷を歩きました。カラサイコの様子見と昨年このチョウの話聞いていたので、確認のために。投稿は、「昨年見ていただいたのですが、あれから目にしませんし、ちょうど1年たってあの時期になりましたので記事にしてください」と。翅の表の柄から「リュウキュウムラサキ」だと思います。分布域を見ても南方系のチョウなので冬を越せたとは思いませんが、もしもということもあって探しました。当然のことで見ることはできませんでした。昨年、台風に乗って飛来したのか、もしかして伊丹昆虫館から逃げ出してきたのか確かなことは分かりませんが、昨今の温暖化の影響もあり、今後もこうした南方系の生き物が見つかるかもしれませんね。



丁度、荒神川と武庫川合流地のミズヒマワリの所で「アサギマダラ」が羽を休めているのを見ました。昨年は、この合流地より北側に、もっとミズヒマワリが咲いている所があり、たくさん乱舞している様子が見られましたが、改修工事で河川敷が削られてなくなり、唯一この場所が翅を休める場所になっています。ご存知のように、「アサギマダラ」



は海を渡って数千kmを旅することから「渡りのチョウ」と

呼ばれています。ヒラヒラと優雅に飛ぶ姿と同時に、こんなにも長い距離を飛ぶということでもなにかロマンを感じます。



最近、社会現象にもなった人気アニメ「鬼滅の刃」に登場する「胡蝶しのぶ」のチョウがアサギマダラをモチーフにしたのではないかと人気を博しているようで、アサギマダラの観察会が大人気だとか。散歩がてら、カラサイコとこのチョウを見に、武庫川に足を運ばれてはどうでしょう。